

“技術”の“開発”

四国地方整備局次長 丸山 隆英



十年ほど前に、政府の技術開発に関する某会議の担当者から、「自分たちが指向する技術開発とは、ナノテクノロジー、バイオテクノロジーや高度医療技術のように、まったく新しい知見を生み出すものである。一方、社会資本整備が必要としている土木技術は、既存の技術の利用を主眼としているものであり、当会議の範疇ではない。」といったようなことを言われたことがありました。その際には猛烈に反論し、その結果、社会資本整備に係る技術開発が、重点分野の1つに位置づけられたと記憶しております。

そもそも“技術”という言葉、「わざ」「うでまえ」「手並み」という同じ意味の漢字を重ねた熟語ですが、広辞苑では「物事を巧みに行うわざ」「科学を実地に応用して自然の事物を改変・加工し、人間生活に役立てるわざ」と定義されており、その英訳を尋ねれば、大体の方が“Technique”とお答えになるのではないのでしょうか。しかし、元々の意味を辿ると、古代ギリシャで使われていた“テクネー”という言葉に行き着き、この言葉が時代を経て英語の“Art”に引き継がれ、これが明治時代に“技術”と和訳されたそうです。和英辞典で“技術”を調べても、“Technique”よりも“Art”が先に記述されている場合も多いのは、こうした理由によるものです。すなわち“技術”とは、自然を巧みに活用して生活に役立てるためのアートであり、土木技術は、我々の生活に直結する最先端の技（わざ）と捉えることができるのではないのでしょうか。

一方、“開発”という言葉、最近では国の政策や組織の名称の中では、ほとんど目にしなくなりました。英語の“Development”も、今では“開発”よりも“発展”“発達”と訳される場合の方が多いように思われます。高度成長期の大規模開発などが、公害、環境破壊を想起させるというのがその主な理由のようですが、“技術”と同様に広辞苑などを調べてみると、「知識を開き導くこと」「知識を利用して有益なものを生み出すこと」と、悪いイメージとはまったく縁のない言葉として定義されています。また、元々は「仏性を開く」「教典を開ける」といった仏教用語のようですが、アメリカ合衆国第33代大統領トルーマンの演説の中で、“Development”が「自然や環境を改変してより良い生活を築く」といった意味で用いられたのが、今日的な“開発”の用法の始まりのようです。

前置きが長くなりましたが、ここで私が申し上げたいのは、社会資本整備に係る技術開発は、言葉の成り立ちや歴史を紐解くと非常に崇高なものであり、我々は、国民の生活の直接的な改善に資する重要な役割を担っている誇りと責任を、今一度認識すべきであるということです。そして、そのためには、時代の要請を敏感に感じられる感覚と、日々の要請の変化への対応を実行に移す勇気とエネルギーを持つことが最も重要なのではないのでしょうか。

今我々は、南海トラフ巨大地震の脅威にさらされ、抜本的な防災・減災対策を早急に進めなくてはなりません。また、社会資本全体の老朽化といった極めて深刻な課題に立ち向かわなくてはなりません。さらには、日本経済の再生に向け、成長による富の創出のための基盤づくりを進めなくてはなり

ません。こうした幾多の課題の解決のため、まさにインフラとなるのが技術であることは論を待たないところであり、我々は、その開発に携わる崇高なアーティストとしての誇りを持ち、日々技術の進歩のために努力しようではありませんか。

なお、ここで記載したいくつかの歴史的事実などについては、一夜漬けで調べたものなので、もし間違いがあったらばお許しください。